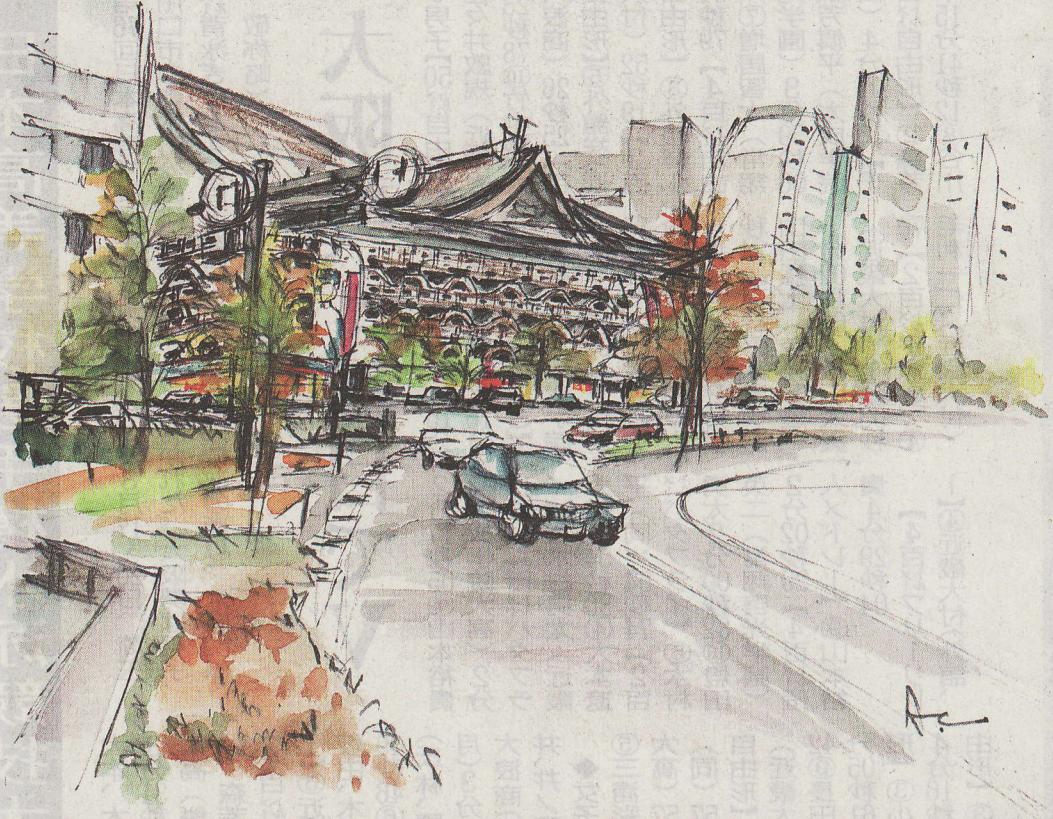


御堂筋のからり

絵・文 熱田親恵



ミニミニで気になる建物 10年に新しくできる上の構えを温存し、歌舞伎に、めったに歌舞伎を上六の近鉄劇場ビルの上層の専門館として復活して演じない新歌舞伎座がある階に移転して再デビューする。しかし、建造物として聞くと、勝手な希望は単なる感傷ではなく、その老朽化も進み、20であるが、現在の桃山風

近松門左衛門や井原西鶴

独特の文化を誇らしく案内したいからである。昔、娘の知人の米国人夫妻が来阪されたとき、「日本独自の文化は何ですか」と聞かれ、一瞬戸惑っていたら、逆に「歌舞伎」「相撲」「すし」があるでしょ!と逆襲され、恥ずかしく思ったことがある。日本の文化、いやその前に、自分の住む大阪の文化に理解と誇りを持つことは、少なくとも国際人として常識かもしれない。

今、自分に問うてみた。江戸時代から大阪人に親しまれてきた文楽や歌舞伎についてどれだけ知っているだろうか。ちなみに、歌舞伎を例にとると、歌舞伎の有名な脚本家の近松門左衛門や井原西鶴

誇りを持つということ、は、まず歴史の事実を知ることから始まるように思う。これまで日本が世界に誇れる文化を大阪で築いてきた歴史上の人物、またそれを顕彰・保

存する人々を輩出しているのに、大阪生まれの文化が大阪に根付かないのは不思議である。その一つの原因は、明治以降の近代化とともに、工業立国・経済大国主義が東京中心に展開されたことにあるようだが、大阪人の心のありようも問題があると思う。

大阪の豊かな歴史の宝庫が、目の目を見ずに泣いているように思えてくる。次々と大阪ブランド

専門館として復活を



らない。この歴史を再点検し、先人の生き方を学べば、大阪独自の未来図が見えてくるだろう。問題は再点検後の発展の仕方である。今日の大阪の人は「育てる」ために、ヒト、モノ、カネ、時間を投資することが苦手なようである。これをカバーできるのが民間の文化人と一般市民の結集力ではないだろうか。この豊かさを文化

ました。(おわりの)